

Botchan Chapter 7 (Natsume Sōseki)

おれは即夜下宿を引き払った。宿へ帰って荷物をまとめていると、女房が何か不都合でもございましたか、お腹の立つ事があるなら、云っておくれたら改めますと云う。どうも驚ろく。世の中にはどうして、こんな要領を得ない者ばかり揃ってるんだらう。出てもらいたいんだか、居てもらいたいんだか分りゃしない。まるで氣狂だ。こんな者を相手に喧嘩をしたって江戸っ子の名折れだから、車屋をつれて来てさっさと出てきた。

出た事は出たが、どこへ行くというあてもない。車屋が、どちらへ参りますと云うから、だまって尾いて来い、今にわかる、と云って、すたすたやって来た。面倒だから山城屋へ行こうかとも考えたが、また出なければならぬから、つまり手数だ。こうして歩いてるうちには下宿とか、何とか看板のあるうちを目付け出すだらう。そうしたら、そこが天意に叶ったわが宿と云う事にしよう。とぐるぐる、閑静で住みよさそうな所をあるいているうち、とうとう鍛冶屋町へ出てしまった。ここは土族屋敷で下宿屋などのある町ではないから、もっと賑やかな方へ引き返そうかとも思ったが、ふといい事を考え付いた。おれが敬愛するうらなり君はこの町内に住んでいる。うらなり君は土地の人で先祖代々の屋敷を控えているくらいだから、この辺の事情には通じているに相違ない。あの人を尋ねて聞いたら、よさそうな下宿を教えてくださいませんか。幸一度挨拶に来て勝手は知ってるから、捜がしてあるく面倒はない。ここだろうと、いい加減に見当をつけて、ご免ご免と二返ばかり云うと、奥から五十ぐらいな年寄が古風な紙燭をつけて、出て来た。おれは若い女も嫌いではないが、年寄を見ると何だかなつかしい心持ちがする。大方清がすきだから、その魂が方々のお婆さんへ乗り移るんだらう。これは大方うらなり君のお母さんだらう。切り下げの品格のある婦人だが、よくうらなり君に似ている。まあお上がりと云うところを、ちょっとお目にかかりたいからと、主人を玄関まで呼び出して実はこれこれだが君どこか心当りはありませんかと尋ねてみた。うらなり先生それはさぞお困りでございましょう、としばらく考えていたが、この裏町に萩野と云って老人夫婦ぎりで暮らしているものがある、いつぞや座敷を明けておいても無駄だから、たしかな人があるなら貸してもいいから周旋してくれと頼んだ事がある。今でも貸すかどうか分らんが、まあいっしょに行つて聞いてみましよう、親切に連れて行つてくれた。

その夜から萩野の家の下宿人となった。驚いたのは、おれがいか銀の座敷を引き払うと、翌日から入れ違いに野だが平気な顔をして、おれの居た部屋を占領した事だ。さすがのおれもこれにはあきれた。世の中はいかさま師ばかりで、お互に乗せっこをしているのかも知れない。いやになった。

世間がこんなものなら、おれも負けない気で、世間並にしなくちゃ、遣りきれない訳になる。巾着切の上前をはねなければ三度のご膳が戴けないと、事が極まればこうして生きてるのも考え物だ。と云ってぴんぴんした達者なからだで、首を縊っちゃ先祖へ濟まない上に、外聞が悪い。考えると物理学校などへは行って、数学なんて役にも立たない芸を覚えるよりも、六百円を資本にして牛乳屋でも始めればよかった。そうすれば清もおれの傍を離れずに済むし、おれも遠くから婆さんの事を心配しらずに暮される。いっしょに居るうちは、そうでもなかったが、こうして田舎へ来てみると清はやっぱり善人だ。あんな気立のいい女は日本中さがして歩いたってめったにはない。婆さん、おれの立つときに、少々風邪を引いていたが今頃はどうしてるか知らん。先だつての手紙を見たらさぞ喜んだろう。それにしても、もう返事がきそうなものだが——おれはこんな事ばかり考えて二三日暮していた。

気になるから、宿のお婆さんに、東京から手紙は来ませんかと時々尋ねてみるが、聞くたんびに何にも参りませんと気の毒そうな顔をする。ここの夫婦はいか銀とは違って、もとが士族だけに双方共上品だ。爺さんが夜になると、変な声を出して謡をうたうには閉口するが、いか銀のようにお茶を入れましようとお無暗に出て来ないから大きに楽だ。お婆さんは時々部屋へ来ていろいろな話をする。どうして奥さんをお連れなさって、いっしょにお出でなんだのぞなもしなどと質問をする。奥さんがあるように見えますかね。可哀想にこれでもまだ二十四ですぜと云ったらそれでも、あなた二十四で奥さんがおありなさるのは当り前ぞなもしと冒頭を置いて、どこの誰さんは二十でお嫁をお貰いたの、どこの何とかさんは二十二で子供を二人お持ちたのと、何でも例を半ダースばかり挙げて反駁を試みたには恐れ入った。それじゃ僕も二十四でお嫁をお貰いのけれ、世話をしておくれんかなと田舎言葉を真似て頼んでみたら、お婆さん正直に本当かなもしと聞いた。

「本当の本当のって僕あ、嫁が貰いたくって仕方がないんだ」

「そうじゃろうがな、もし。若^{わか}いうちは誰もそんなものじゃけれ」この挨拶^{あいさつ}には痛み^{いた}入^いって返事^{へんじ}が出来^{でき}なかった。

「しかし先生^{せんせい}はもう、お嫁^{よめ}がおありなさに極^{きま}っとらい。私はちゃんと、もう、睨^ねらんどるぞなもし」

「へえ、活眼^{かつがん}だね。どうして、睨^ねらんどるんですか」

「どうしてて。東^{とう}京^{きょう}から便^{たよ}りはないか、便^{たよ}りはないかて、毎^{まい}日^{にち}便^まりを待^まち焦^こがれておいでるじゃないかなもし」

「こいつあ驚^{おどろ}いた。大^{たい}変^{へん}な活眼^{かつがん}だ」

「中^{あた}りましたろうがな、もし」

「そうですね。中^しったかも知^しれませんよ」

「しかし今^{いま}時^{どき}の女^{おなご}子は、昔^{むかし}と違^{ちご}うて油^ゆ断^{だん}が出来^{でき}んけれ、お気^きをお付^つけたがええぞなもし」

「何^{なん}ですかい、僕^{ぼく}の奥^{おく}さんが東^{とう}京^{きょう}で間^ま男^{おとこ}でもこしらえていますか」

「いいえ、あなたの奥^{おく}さんはたしかじゃけれど……」

「それで、やっ^あんと安^{あん}心^{しん}した。それじゃ何^{なに}を気^きを付^つけるんです」

「あなたのはたしか——あなたのはたしかじゃが——」

「どこに不^ふたしかなの^いが居^いますかね」

「ここ等^らにも大^{だい}分^ぶ居^おります。先生^{せんせい}、あ^との遠^と山^{やま}のお嬢^{じょう}さんをご存^{ぞん}知^じかなもし」

「いいえ、知^しりませんね」

「まだご存^{ぞん}知^じないかなもし。ここらであな^{いち}た一^{ばん}の別^べ嬪^{びん}さんじゃがなもし。あまり別^べ嬪^{びん}さんじゃけれ、学^が校^{っこう}の先^{せん}生^{せい}方^{がた}はみんなマド^いン^きナマド^きン^きナと^いうといでるぞなもし。まだお聞^ききんの^いかなもし」

「うん、マドンナですか。僕あ芸者の名かと思つた」

「いいえ、あなた。マドンナと云うと唐人の言葉で、別嬪さんの事じゃろうがなもし」

「そうかも知れないね。驚いた」

「大方画学の先生がお付けた名ぞなもし」

「野だがつけたんですかい」

「いいえ、あの吉川先生がお付けたのじゃがなもし」

「そのマドンナが不たしかなんですかい」

「そのマドンナさんが不たしかなマドンナさんでな、もし」

「厄介だね。渾名の付いてる女にや昔から碌なものは居ませんからね。そうかも知れませんよ」

「ほん当にそうじゃなもし。鬼神のお松じゃの、姐妃のお百じゃのてて怖い女が居りましたなもし」

「マドンナもその同類なんですかね」

「そのマドンナさんがなもし、あなた。そらあの、あなたをここへ世話をしておくれた古賀先生なもし——あの方の所へお嫁に行く約束が出来ていたのじゃがなもし——」

「へえ、不思議なもんですね。あのうらなり君が、そんな艶福のある男とは思わなかった。人は見懸けによらない者だな。ちっと気を付けよう」

「ところが、去年あすこのお父さんが、お亡くなりて、——それまではお金もあるし、銀行の株も持つてお出るし、万事都合がよかったのじゃが——それからというものは、どういふものか急に暮し向きが思わしくなくなって——つまり古賀さんがあまりお人が好過ぎるけれ、お欺されたんぞなもし。それや、これやでお興入も延びているところへ、あの教頭さんがお出でて、是非お嫁にほしいとお云いるのじゃがなもし」

「あの赤シャツがですか。ひどい奴だ。どうもあのシャツはただのシャツじゃないと思ってた。それから？」

「人を頼んで懸合うておみると、遠山さんでも古賀さんに義理があるから、すぐには返事は出来かねて——まあよう考えてみようぐらいの挨拶をおしたのじゃがなもし。すると赤シャツさんが、手蔓を求めて遠山さんの方へ出入をおしるようになって、とうとうあなた、お嬢さんを手馴付けておしまいたのじゃがなもし。赤シャツさんも赤シャツさんじゃが、お嬢さんもお嬢さんじゃてて、みんなが悪く云いますのよ。いったん古賀さんへ嫁に行くてて承知をしときながら、今さら学士さんがお出たけれ、その方に替えよてて、それじゃ今日様へ済むまいがなもし、あなた」

「全く済まないね。今日様どころか明日様にも明後日様にも、いつまで行つたつて済みっこありませんね」

「それで古賀さんにお気の毒じゃてて、お友達の堀田さんが教頭の所へ意見をしにお行きたら、赤シャツさんが、あしは約束のあるものを横取りするつもりはない。破約になれば貰うかも知れんが、今のところは遠山家とただ交際をしているばかりじゃ、遠山家と交際をするには別段古賀さんに済まん事もなからうとお云いるけれ、堀田さんも仕方がなしにお戻りたそうな。赤シャツさんと堀田さんは、それ以来折合がわるいという評判ぞなもし」

「よくいろいろな事を知ってますね。どうして、そんな詳しい事が分るんですか。感心しちまった」

「狭いけれ何でも分りますぞなもし」

「わり過ぎて困るくらいだ。この容子じゃおれの天麩羅や団子の事も知ってるかも知れない。厄介な所だ。しかしお蔭様でマドンナの意味もわかるし、山嵐と赤シャツの関係もわかるし大いに後学になった。ただ困るのはどっちが悪る者だか判然しない。おれのような単純なものには白とか黒とか片づけてもらわないと、どっちへ味方をしていいか分らない。」

「赤シャツと山嵐たあ、どっちがいい人ですかね」

「山嵐て何ぞなもし」

「山嵐というのは堀田の事ですよ」

「そりゃ強い事は堀田さんの方が強そうじゃけれど、しかし赤シャツさんは学士さんじゃけれど、働きはある方ぞな、もし。それから優しい事も赤シャツさんの方が優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がええというぞなもし」

「つまりどっちがいいんですかね」

「つまり月給の多い方が豪いのじゃろうがなもし」

これじゃ聞いたって仕方がないから、やめにした。それから二三日して学校から帰るとお婆さんがにこにこして、へえお待遠さま。やっと参りました。と一本の手紙を持って来てゆっくりご覧と云って出て行った。取り上げてみると清からの便りだ。符箋が二三枚ついてるから、よく調べると、山城屋から、いか銀の方へ廻して、いか銀から、萩野へ廻って来たのである。その上山城屋では一週間ばかり逗留している。宿屋だけに手紙まで泊るつもりなんだろう。開いてみると、非常に長いもんだ。坊っちゃんの手紙を頂いてから、すぐ返事をかこうと思ったが、あいにく風邪を引いて一週間ばかり寝ていたものだから、つい遅くなって済まない。その上今時のお嬢さんのように読み書きが達者でないものだから、こんなまずい字でも、かくのによっぽど骨が折れる。甥に代筆を頼もうと思ったが、せっかくあげるのに自分でかかなくっちゃ、坊っちゃんに済まないと思って、わざわざ下たがきを一返して、それから清書をした。清書をするには二日で済んだが、下た書きをするには四日かかった。読みにくいかも知れないが、これでも一生懸命にかいたのだから、どうぞしまいまで読んでくれ。という冒頭で四尺ばかり何やらかやら認めてある。なるほど読みにくい。字がまずいばかりではない、大抵平仮名だから、どこで切れて、どこで始まるのだから句読をつけるのによっぽど骨が折れる。おれは焦っ勝ちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は、五円やるから読んでくれと頼まれても断わるのだが、この時ばかりは真面目になって、始から終まで読み通した。読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味が繋がらないから、また頭から読み直してみた。部屋のなかは少し暗くなって、前の時より見にくく、なったから、とうとう椽鼻へ出て腰をかけながら鄭寧に拝見した。すると初秋の風が芭蕉の葉を動かして、素肌に吹きつけた帰りに、読みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、しまいぎわには四尺あまりの半切れがさらりさらりと鳴って、手を放すと、向うの生垣まで飛んで行きそうだ。おれ

はそんな事には構ってられない。坊っちゃんたけ わは竹きしょうを割ったような気性だが、ただ肝癩かんしゃくが強過ぎてそれが心配になる。——ほかの人に無暗に渾名なんか、つけるのは人に恨まれるものになるから、やたらに使っちゃいけない、もしつけたら、清だけに手紙で知らせる。——田舎者いなかもは人がわるいそうだから、気をつけてひどい目に遭わないようにしろ。——気候だつて東京より不順ふじゆんに極きまってるから、寝冷ねびえをして風邪を引いてはいけない。坊っちゃんの手紙はあまり短過ぎて、容子みじかすがよくわからないから、この次にはせめてこの手紙の半分ぐらいの長さのを書いてくれ。——宿屋しゆくやへ茶代ちやだいを五円やるのはいいが、あとで困りやしないか、田舎へ行って頼りになるはお金ばかりだから、なるべく儉約けんやくして、万一の時に差支さしつかえないようにしなかつちやいけない。——お小遣こづかいがなくて困るかも知れないから、為替かわせで十円じゅうえんあげる。——先だつて坊っちゃんからもらった五十円ごじゅうえんを、坊っちゃんが、東京へ帰つて、うちを持つ時の足しにと思つて、郵便局へ預けておいたが、この十円を引いてもまだ四十円あるから大丈夫だ。——なるほど女おんなと云うものは細かいものだ。

おれが椽鼻えんばなで清の手紙をひらつかせながら、考かんがえ込んでいると、しきりの襖ふすまをあけて、萩野のお婆さんが晩めしを持ってきた。まだ見てお出でるのかなもし。えっほど長いお手紙じやなもし、と云つたから、ええ大事な手紙だから風かぜに吹かしては見、吹かしては見るんだと、自分でも要領じぶんを得ない返事をして膳ぜんについた。見ると今夜も薩摩芋こんやの煮つけだ。ここのうちは、いか銀ぎんよりも鄭寧ていねいで、親切しんせつで、しかも上品じょうひんだが、惜しい事に食くい物がまずい。昨日も芋いも一昨日も芋で今夜も芋だ。おれは芋は大好きだと明言めいげんしたには相違そういないが、こう立てつづけに芋を食くわされては命いのちがつづかない。うらなり君くんを笑わらうどころか、おれ自身が遠じしんからぬうちに、芋のうらなり先生せんせいになつちまう。清ならこんな時に、おれの好きな鮪まぐろのさし身みか、蒲鉾かまぼこのつけ焼やきを食くわせるんだが、貧乏びんぼう土族しぞくのけちん坊ぼうと来きちゃ仕方しかたがない。どう考えても清といつしよでなくつちあ駄目だ。もしあの学校がっこうに長くでも居る模様なら、東京から召めい寄きせてやろう。天麩羅蕎麦てんぷらそばを食くつちやならない、団子だんごを食くつちやならない、それで下宿げしゆくに居て芋ばかり食くつて黄色きいろくなつていろなんて、教育者きょういくしやはつらいものだ。禅宗坊主ぜんしゅうぼうずだつて、これよりは口くちに栄耀えいようをさせているだろう。——おれは一皿ひとさらの芋を平たいらげて、机つくえの抽斗ひきだしから生卵なまたまごを二つ出して、茶碗ちやわんの縁ふちでたたき割わつて、ようやくしの生卵えいようでも營養えいようをとらなくつちあ一週いっしゅうにじゅういちじかん じゅぎょう で き 二十一時間の授業じゅぎょうが出来るものか。

きょう きよ てがみ ゆ い じかん おそ まいにち い いちにち か
今日は清の手紙で湯に行く時間が遅くなった。しかし毎日行きつけたのを一日でも欠かすの
こころも きしや の で か れい あかてぬぐい さ ていしゃば く
は心持ちがわるい。汽車にでも乗って出懸けようと、例の赤手拭をぶら下げて停車場まで来
にさんぶんまえ はっしや しやうしやうま こし か しきしま
ると二三分前に発車したばかりで、少々待たなければならぬ。ベンチへ腰を懸けて、敷島
ふ ぐうぜん くん はなし き
を吹かしていると、偶然にもうらなり君がやって来た。おれはさっきの話 を聞いてから、う
らなり君がなおさら気の毒になった。平常から天地の間に居候をしているように、小さく
かま かわ み こんや あわ さわ でき
構えているのがいかにも憐れに見えたが、今夜は憐れどころの騒ぎではない。出来るならば
げつきゆう ばい とおやま じょう あした けっこん いっかげつ とうきやう あそ
月給を倍にして、遠山のお嬢さんと明日から結婚さして、一ヶ月ばかり東京へでも遊び
にやってやりたい気がした矢先だから、やお湯ですか、さあ、こっちへお懸けなさいと威勢よ
せき ゆず おそ い ていさい かも えんりよ なん
く席を譲ると、うらなり君は恐れ入った体裁で、いえ構うておくれなさるな、と遠慮だか何
だかやっぱり立ってる。少し待たなくっちゃ出ません、草臥れますからお懸けなさいとまた勧
めてみた。実はどうかして、そばへ懸けてもらいたかったくらいに気の毒でたまらない。それ
ではお邪魔を致しましょうとようやくおれの云う事を聞いてくれた。世の中には野だみたよう
なまいき で す とおころ かなら かお だ やつ やまあらし い
に生意気な、出ないで済む所へ必ず顔を出す奴もいる。山嵐のようにおれが居なくっちゃ
にっぽん こま つら かた うえ の くたび すす
日本が困るだろうと云うような面を肩の上へ載せてる奴もいる。そうかと思うと、赤シャツ
のようにコスメチックと色男の間屋をもって自ら任じているのもある。教育が生きてフロ
ックコートを着ればおれになるんだと云わぬばかりの狸もいる。皆々それ相応に威張ってる
き き い たぬき みなみな そうおう い ば
んだが、このうらなり先生のように在れどもなきがごとく、人質に取られた人形のように
おとな けっこう おとこ す
大人しくしているのは見た事がない。顔はふくれているが、こんな結構な男を捨てて赤シャ
ツに靡くなんて、マドンナもよっぽど気の知れないおきやんだ。赤シャツが何ダース寄ったつ
りっぱ だんなさま
て、これほど立派な旦那様が出来るもんか。

「あなたはどっか悪いんじゃないですか。大分たいぎそうに見えますが……」 「いえ、別段
これという持病もないですが……」

「そりゃ結構です。からだが悪いと人間も駄目ですね」

「あなたは大分ご丈夫のようですね」

「ええ瘠せても病気はしません。病気なんてもものあ大嫌いですから」

うらなり君は、おれの言葉を聞いてにやにやと笑った。

ところへ入口で若々しい女の笑声が聞えたから、何心なく振り返ってみるとえらい奴が来た。色の白い、ハイカラ頭の、背の高い美人と、四十五六の奥さんとが並んで切符を売る窓の前に立っている。おれは美人の形容などが出来る男でないから何にも云えないが全く美人に相違ない。何だか水晶の珠を香水で暖ためて、掌へ握ってみたような心持ちがした。年寄の方が背は低い。しかし顔はよく似ているから親子だろう。おれは、や、来たなと思う途端に、うらなり君の事は全然忘れて、若い女の方ばかり見ていた。すると、うらなり君が突然おれの隣から、立ち上がって、そろそろ女の方へ歩き出したんで、少し驚いた。マドンナじゃないかと思った。三人は切符所の前で軽く挨拶している。遠いから何を云ってるのか分らない。

駐車場の時計を見るともう五分で発車だ。早く汽車がくればいいがなと、話し相手が居なくなつたので待ち遠しく思っていると、また一人あわてて場内へ駆け込んで来たものがある。見れば赤シャツだ。何だかべらべら然たる着物へ縮緬の帯をだらしなく巻き付けて、例の通り金鎖りをぶらつかしている。あの金鎖りは贗物である。赤シャツは誰も知るまいと思つて、見せびらかしているが、おれはちゃんと知ってる。赤シャツは駆け込んだなり、何かきよろきよろしていたが、切符売下所の前に話している三人へ慇懃にお辞儀をして、何か二こと、三こと、云つたと思つたら、急にこっちへ向いて、例のごとく猫足にあるいて来て、や君も湯ですか、僕は乗り後れやしないかと思つて心配して急いで来たら、まだ三四分ある。あの時計はたしかかしらんと、自分の金側を出して、二分ほどちがつてると云いながら、おれの傍へ腰を卸した。女の方はちっとも見返らないで杖の上に顔をのせて、正面ばかり眺めている。年寄の婦人は時々赤シャツを見るが、若い方は横を向いたままである。いよいよマドンナに違いない。

やがて、ピューと汽笛が鳴って、車がつく。待ち合せた連中はそろそろ吾れ勝に乗り込む。赤シャツはいの一号に上等へ飛び込んだ。上等へ乗つたって威張れるところではない、住田まで上等が五銭で下等が三銭だから、わずか二銭の違いで上下の区別がつく。こういうおれでさえ上等を奮発して白切符を握ってるんでもわかる。もっとも田舎者はけちだから、たつた二銭の出入でもすこぶる苦になると見えて、大抵は下等へ乗る。赤シャツのあとからマドンナとマドンナのお袋が上等へはいり込んだ。うらなり君は活版で押したように下等ばかりへ乗る男だ。先生、下等の車室の入口へ立って、何だか躊躇の体であったが、おれの顔を

見るや否や思いきって、飛び込んでしまった。おれはこの時何となく気の毒でたまらなかったから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ乗り込んだ。上等の切符で下等へ乗るに不都合はなからう。

温泉へ着いて、三階から、浴衣のなりで湯壺へ下りてみたら、またうらなり君に逢った。おれは会議や何かでいざと極まると、咽喉が塞がって饒舌れない男だが、平常は随分弁ずる方だから、いろいろ湯壺のなかでうらなり君に話しかけてみた。何だか憐れぼくってたまらない。こんな時に一口でも先方の心を慰めてやるのは、江戸っ子の義務だと思ってる。ところがあいにくうらなり君の方では、うまい具合にこっちの調子に乗ってくれない。何を云っても、えとかいえとかぎりて、しかもそのえといえが大分面倒らしいので、しまいにはとうとう切り上げて、こっちからご免蒙った。

湯の中では赤シャツに逢わなかった。もっとも風呂の数たくさんあるのだから、同じ汽車で着いても、同じ湯壺で逢うとは極まっていない。別段不思議にも思わなかった。風呂を出てみるといい月だ。町内の両側に柳が植って、柳の枝が丸い影を往来の中へ落している。少し散歩でもしよう。北へ登って町のはずれへ出ると、左に大きな門があって、門の突きあたりがお寺で、左右が妓楼である。山門のなかに遊廓があるなんて、前代未聞の現象だ。ちょっとはいつてみたいが、また狸から会議の時にやられるかも知れないから、やめて素通りにした。門の並びに黒い暖簾をかけた、小さな格子窓の平屋はおれが団子を食べ、しくじった所だ。丸提灯に汁粉、お雑煮とかいたのがぶらさがって、提灯の火が、軒端に近い一本の柳の幹を照らしている。食いたいなと思ったが我慢して通り過ぎた。

食いたい団子の食えないのは情ない。しかし自分の許嫁が他人に心移したのは、なお情ないだろう。うらなり君の事を思うと、団子は愚か、三日ぐらい断食しても不平はこぼせない訳だ。本当に人間ほどあてにならないものはない。あの顔を見ると、どうしたって、そんな不人情な事をしそうには思えないんだが——うつくしい人が不人情で、冬瓜の水膨れのよな古賀さんが善良な君子なのだから、油断が出来ない。淡泊だと思った山嵐は生徒を煽動したと云うし。生徒を煽動したのかと思うと、生徒の処分を校長に逼るし。厭味で練りかためたような赤シャツが存外親切で、おれに余所ながら注意をしてくれるかと思うと、マドンナを胡魔化したり、胡魔化したのかと思うと、古賀の方が破談にならなければ結婚は望まないんだと云うし。いか銀が難癖をつけて、おれを追い出すかと思うと、すぐ野だ公が入れ

かわ 替ったり——どう かんが 考 えてもあてにならない。こんな事を 清にかいて きたら 定めて 驚く事 だろう。箱根の向うだから 化物が 寄り合 ってるんだと云うかも知れない。

おれは、性 来 構わない性 分 だから、どんな事でも 苦にし ないで 今日まで 凌いで 来たのだ が、ここへ来てから まだ一ヶ月 立つか、立たないうちに、急に 世のなかを 物騒に 思い出 した。別段 際だった 大事件にも 出逢わ ないのに、もう 五つ六つ 年を取 ったよう な気がする。早 く切り 上げて 東京へ 帰るのが 一番よ かり。な どとそれ からそれへ 考えて、 いつか 石橋を 渡って 野芹川 の堤へ 出た。川 と云うと えらそう だが実 は一聞 ぐらい な、ちょろ ちょろ した流 れで、土 手に沿 うて 十二丁 ほど下 ると 相生村 へ出る。 村には 観音様 がある。

温泉の 町を 振り返 ると、赤い 灯が、月 の光の中 にかがや いている。太鼓 が鳴る のは遊廓 に 相違ない。川 の流れは 浅いけれ ども早い から、神 経質の水 のように やたらに 光る。ぶら ぶら土 手の上を あるきなが ら、約三 丁も来 たと思 ったら、 向うに 人影が 見え出 した。月 に透か してみると 影は二つ ある。温泉 へ来て 村へ帰 る若い 衆かも知 れない。 それにして は唄も うた わない。存 外静か だ。

だんだん 歩いて行くと、おれの方が 早足だと 見えて、 二つの 影法師が、 次第に 大きくなる。 一人は 女らしい。 おれの 足音を 聞きつけて、 十間ぐ らいの 距離に 逼った時、 男が たちま ち振り 向いた。月 は後から さしている。 その時 おれは 男の 様子を見 て、はて なと思 った。男 と女は また元の 通りにある き出した。 おれは 考 えがある から、急に 全速力 で追っ 懸けた。 先方は 何の気も つかずに 最初の 通り、ゆる ゆる歩を 移している。 今 は話し 声も手 に取る ように 聞える。土 手の幅は 六尺ぐ らいだから、 並んで 行けば 三人が ようやく だ。おれ は苦も なく 後ろから 追い付 いて、男 の袖を 擦り 抜けざま、 二足前 へ出した 踵を ぐるりと 返して 男の顔 を覗き 込んだ。月 は正面 からおれ の五分 刈の頭 から 顚の 辺りまで、 会釈も なく照 す。男は あつと 小声に 云ったが、 急に 横を向 いて、もう 帰ろうと 女を促 がすが 早いか、 温泉の 町の方へ 引き返 した。

赤シャツは 図太くて 胡魔化 すつもり か、気が 弱くて 名乗り 損な ったのか しら。と ころが 狭くて 困 ってる のは、おれ ばかりで はなかつ た。